
ROCK SHOOTER the game 【again game full scor】

H&K PSG-1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A C K R O C K S H O O T E R t h e g a m e
a g a i n g a m e f u l l s c o r e 【

【Nコード】

N 2 2 2 1 W

【作者名】

H & a m p ; K P S G - 1

【あらすじ】

人類を滅亡に追いやった強襲者。『エイリアン』

その強襲者達の『総督』であつた少女を倒し、エイリアンを退けた、生体アーマメントの少女。『ステラ』

倒すべき敵、守るべき味方を失った彼女は、嘗ての戦友達を追うように、自らの命を捨てた。しかし、死ぬ事の出来なかった彼女がそこで見たモノ。

それは、嘗ての自分の様に、人類の敵に立ち向かう少女達だった・・

・。

BLACK ROCK SHOOTER the game
発売記念作品。

Story 推奨Lv 0 『LEAVE EARTH』(前書き)

やってしまった。

予想以上に内容の濃いゲームだったため、書いてしまった。

後悔はしたくないので、最後まで頑張りたいと思います。

Story 推奨Lv 0 『LEAVE EARTH』

2032年 11月16日13時7分54秒66
突如、地球を侵略し始めたエイリアンにより、人類は瞬く間に人口を減らしつつあった。

そして開戦から19年たった、2051年9月25日。
遂に人類の総人口は12人となり、いつ人類滅亡となっても可笑しくない情景になった。

だがこの日、12人が人類の未来を託した、一人の少女が覚醒した。

少女は圧倒的戦闘能力でエイリアンを殲滅して行った。

人類やA級エイリアンと呼ばれる特殊な集団と、出会いと別れを繰り返して行った。

そして、エイリアン達から【総督】と崇められた、少女に瓜二つの少女との、月面での戦闘。

少女は【総督】に打ち勝ち、少女はエイリアンから地球を守る事に成功した。

しかし、人類は、彼女を残して滅亡してしまった。

事切れた【総督】に、少女は語りかける。

「残念ね……………私はホワイトじゃない……………私は……………」

数年後・・・

北極の大地、そこを走る二頭のホッキョクグマを、少女は見つめていた。

本来、この地球では、ホッキョクグマは絶滅動物。

「マリオン師長・・・

約束、守ったよ・・・。

ロスコル・・・みんな・・・。」

敵により殺されていった12人の戦友。

そして、

「ナナ・・・。」

ナナの口から出た最後の言葉。

『バイバイ』

せめてもう一度、彼女と話をしたかった。しかし、彼女はもう居ない。

自分のプロトタイプである彼女と分かり会えたのか、分からなかった。

「・・・・・・・・・・。」

視界からホッキョクグマが消える。

あの二匹から、また地球は栄えて行くのだろうか。

それすらも分からない。それはあの二匹次第だ。少女に出来る事はない。

そう、“少女に出来る事は無くなった”

守るべき味方も、倒さなければならぬ敵も、消えた。

「私がここに居る意味は・・・
もうない。」

私の居場所は・・・もうない。」

少女は、近くに停めて合った戦闘機に乗り込む。

地球に帰って来た後、東京で見つけたナナの戦闘機。

エンジンにを吹かし、音速を凌駕する速度で北極の大地を横切ってゆく。

強烈なGが体に掛かるが、少女は更に速度を上げてゆく。

そして、徐に機体を垂直飛行に移行させた。

この速度で進めば、数十秒後には大気圏に突入し、バラバラになってしまう。

少女はそれを望んだ。死を望んだ。

「みんな・・・ナナ・・・。
今逝くよ。」

体に掛かるGの浮遊感を心地よく感じる。

「私はホワイトじゃない・・・。」

機体が赤く燃え、

「私は・・・。」

チリとなり、

「ブラック ロックシューター」

消滅した。

S t o r y 推奨Lv 0 『LEAVE EARTH』(後書き)

ゲームの世界感を壊したくないので、基本シリアスです。

Story 推奨Lv 1 『A GROTESQUE』（前書き）

あれ？ストパンのストーリーが・・・
なんか怪しい作者です。

不安が残りますが、一応投稿します。
誤植があつたらご指摘を・・・。

『グレイ』・・・ステラの様に、生態アーマメント技術を施された
クローン体の人間。

未完成体は記憶欠如が激しく、やがてはその記憶処理能力も含めた
全てが、運動能力に支配されてしまうという、逃れられない運命に
縛られている。

Story 推奨Lv 1 『A GROTESQUE』

少女、ステラは、業火に包まれていく街を駆けていた。

意識を取り戻したのは十分程前、直前まで操縦していた戦闘機、ブリュンヒルデの Cockpit でだ。

“なんで私は生きているのか。”

ステラが感じた最初の疑問。確かに彼女は、大気圏で消滅した筈だった。

しかし、彼女の体に異常は無く、ブリュンヒルデも傷一つない。言ってみれば非常に有り得ない事だ。

しかし、新たな疑問が、古い疑問を押しつけて頭を占拠する。

まず上空。そこにあるのは異形。

巨大で全身黒色。所々にある赤い斑点の様なもの。そこから放たれる赤い熱線は、街に新たな被害を加えて行く。

「なに・・・あれ。」

一見すれば彼女の良く知るモノに似ている。

“エイリアン”

しかし、『グレイ』だけが感じる事の出来るエイリアン特有の気配を、異形からは感じられない。

あれはエイリアンではない。彼女の本能がそう告げた。

ならばあれはなんなのか。彼女に分かる筈が無かった。

そして頭に浮かぶもう一つの疑問。

彼女は目の前の光景を信じられなかった。

「人だ……」

其処に居たのは、紛れもない人間だった。普通、街に人間が居ることに驚く人は居ないが、彼女の場合は事情が違う。

彼女が知る限り、地球には彼女を除いて人間は居ない筈なのだ。

嘗て、十二人の戦友達と居た部隊、『PSS』では、エイリアンの殲滅の他、世界のどこかに生き残っている人間を保護する事も仕事の一つだった。

一人でも多く、生き残っている人間を助けようとしていたPSSが、街一つ分の人間が生き残っているのを察知しない筈が無いのだ。

しかし、目の前には間違いなく人間がいる。必死に逃げ惑う人。傷を追い、苦痛を顔に浮かべる人。瓦礫に埋もれ、事切れている人。様々だった。

彼女は思う。今は疑問解決よりも、目の前の命を大切にすべきだと。

PSSでは、生き残った人間を保護していた。人間を攻撃するものは仲間の敵。仲間の敵は、

「私の敵。」

そう呟くと、彼女は街に向かった。
敵を倒す為ではない。彼女に遥か上空の敵を倒す術はない。
ならば、一人でも多くの命を救う事を優先する。彼女の出した結論
だった。

“ネウロイ”

それは人類の敵。 1939年9月。
兼ねてよりその存在を知られていたネウロイは、突然の侵略活動を
開始した。

その目的を知る者は居ない。奴らはただ、瘴気を撒き散らし、破壊
を繰り返すのみ。

圧倒的速度の侵略は、人々を次々と故郷から追いやった。

そして今、また一つの街が破壊されて行く。

その街の名は、“カールスラント”

“ウィッチ”

それは、魔力を公使する少女達。

“ストライカーユニット”

それは、扶桑の科学者、宮藤博士により制作されたウィッチ達の筈。
この2つ、ネウロイに対抗する術。

カールスラントを破壊するネウロイにも、三人のウィッチが立ち向かっていた。

ゲルトハート・バルクホルン
エリーカ・ハルトマン
ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ

いずれも、カールスラントを故郷とする三人。故郷を破壊し続けるネウロイに、怒りの感情は限界を超えていた。

三人の攻撃は始まる。
それぞれの武装で、ネウロイの体に傷を付けて行く。

もちろんネウロイも黙っている訳では無く、三人に向け熱線を放つ。

しかし、巨大な体を持ち合わせたネウロイは格好の的。

熱線はウィッチ特有の魔力障壁で相殺され、三人に当たる事を許さない。

そんなやりとりの中、ネウロイの体の中から露出しているモノがあった。

“コア”

ネウロイの心臓に当たるモノ。破壊出来ればネウロイも破壊できる。

「うおおおおッッ！」

叫びと共に乱射される銃弾。

その一つがコアを貫き、破壊した。
連動してネウロイが朽ちて行く。
白い破片となって街に落ちて行く。

そんな中、街を見ていたバルクホルンは、とんでも無いことに気付く。

見えた。街の中で、一人、泣いている少女。見間違える筈がない。
あれは……。あの娘は……。

「クリスッ!!?」

実の妹。クリスティアーネ・バルクホルン。

クリスは気付いていない。自分の居場所にネウロイの破片の一つが落ちて来ている事に。

バルクホルンは叫ぶ。

叫びながらクリスのもとへと向かう。

自分の被害なんてどうでも良い。

あの娘が助かってくれればそれで満足だ。

しかし、無情にも破片が落ちるまで時間が無い。

「クリスウウウウウ!!」

叫んだ所で結果は変わらない。

間に合わないのだ。自分の力では、クリスを助ける事ができない。

「（起こってくれッ！奇跡ッ！）」

神にもすぎる思いでそう願う。

そして――。

神はバルクホルンに微笑んだ。

クリスの側から飛び出す、一筋の蒼い熱線。

それは、ネウロイの破片を飲み込み、跡形も無く蒸発させた。

その熱線はそれでも飽き足りないと言う様に、他の破片までもを飲み込み、街に落ちる破片を最小限にまで抑える。

結果として、クリスには被害は及ばなかった。その事実には、バルクホルンはおろか、エリーカやミーナまでもが安堵の息を漏らす。

そして三人はそれを目にした。

街を破壊し続ける赤い業火の中に、

ただ一つ、神秘的な蒼い炎を。

少女、クリスを助けたのは、他でもない、ステラだった。

突然、上空で破壊活動が続いていた異形が崩壊を始めた時、彼女は空に浮かび、異形と戦闘を行っていた人間に初めて気が付いた。

異形が崩壊した事に安堵する彼女だったが、次の瞬間には、行動を起こしていた。

その訳は、一人の少女。

逃げ遅れたのだろうか、彼女の数十m先で泣いている。

そして、その少女に、異形の破片が迫っていた。

彼女が行動を起こすには十分な時間。

一瞬で少女のもとに駆け寄り、その右手の武器、『ロッキャノンの改造型、『ダインハルコン』を起動し、スキルを発動する。そのスキルの名は、

『フォトンシャワー』

彼女の攻撃で最も強力な射撃。

「当たれ」

彼女はそう呟き、撃った。

強力な射撃は、破片を消し去り、空高く消えて行った。

泣いていたクリスが彼女の存在に気付いて声をかける。

「誰・・・？ お姉ちゃん・・・？」

僅かに恐怖の入り混じった声での質問に、彼女は悲しそうな顔で答える。

「ステラ。」

そう彼女が答えると、クリスが何かを言う前に、空から人間が降りてきた。

クリスを助けてくれたあの蒼い炎。

正体を確かめる為に地上に向かうと、底にはクリスの他に、もう一人少女がいた。

左右異なる長さの黒色ツインテール。

そして、露出の高い服装）お前らが言えたタチか。by 作者をしていた。

しかし、そんな事など可愛く思える程の異常をその少女は持っていた。

一つは、右手に装着された巨大な武器らしきモノ。

キャノン砲とチェーンソーが一体化したような奇妙な武器。

そしてもう一つ。

彼女の左目に灯る、蒼い炎。

「お前なのか！

クリスを助けてくれたのは！？」

とにかく礼が言いたかった。

最愛の妹を助けて貰ったのだから。

「……………そうだけど。」

「お前はウィッチなのか？」

「ウィッチ……………」

「それは何なの？」

「なっ……………！？」

三人は混乱した、あれだけの事をやっておきながら、自分はウィッチではないと言っている。

それどころか、ウィッチの事を知らない様だった。

この御時世、ウィッチを知らない人間が居ることを信じる事が出来なかった。

「……………ちょっといいかしら。」

ミーナがステラに話掛ける。

「……………何？」

「少し話したいのだけど……………一緒に来てくれないかしら。」

「いや。」

余りにバツサリと切り捨てられた事に、ミーナは声を荒げようとするが……………、

「……………え？」

其処に彼女の姿は無かった。

S t o r y 推奨Lv 2 『BLUE MYSTERY』(前書き)

遅い更新の割、ちっとも文章が上手く書けない作者です。

文章を長めにする事も出来ず、情けないですが、それでも宜しい方はどうぞ

題名も適當すぎる・・・

Story 推奨Lv 2 『BLUE MYSTERY』

1944年 某日

あの日、故郷カールスラントが落ちてから早5年。以前としてネウロイは破壊活動が続いている。そして私、ミーナ デイトリンデ ヴィルケも、現役ウィッチとして、501統合航空戦闘団「ストライクウィッチーズ」部隊長として、皆と共に戦っている。

つい最近、扶桑皇国出身の宮藤さんが新たな仲間として入隊し、隊員数が11人となった。

そういえば、トゥルーデが宮藤さんが来てからどこかそわそわしている気がしたんだけど・・・気のせいかしら？

大方妹のクリスちゃんの事でも考えていたのだと思う。

・・・クリスちゃんの事を考えると、決まって一つの光景を思い出す。

破壊の赤い炎の中に、ただ一つ燃え盛る蒼い炎。その 蒼い炎を目に宿した少女。

何者なのかも分からない少女。あの後、いくら固有魔法を使って周囲を搜索しても、あの娘を見つける事は出来なかった。

勿論、軍の上官なんかにも報告したけれど、帰って来た返事と言え
ば、

『今はネウロイを殲滅する事だけを考えろ』。・・・だって。

あながち間違った事は言われて無かったから、反論も出来ずに従うしかなかったけれど・・・。

ただ、トゥルーデだけはまだ諦めがつかないらしく、一言礼だけでも、時々他の隊のウィッチから情報収集しているみたい。

今考えると、ますます奇妙な少女だったわね。

圧倒的な火力でネウロイの破片を吹き飛ばし、三人のウィッチに全く悟られる事なくその場から姿を消した。どう考えても、普通の人間ではなかったわよね・・・。と言うより、目に炎灯してる時点で普通の人間な訳ないか・・・。

だからといって、ウィッチかと聞いた時には、初めて聴く単語だったらしく、逆に聞き返されたし・・・。

・・・・・・悩んでも仕方ない・・・か。

結局、あの少女に関する情報はないわけだし、ましてや、もう一度会える確率は天文学的数字。

でもそうね・・・

万一にも、もう一度合う事が出来るのならば・・・。

ああ、考え事してもう15分も経ってる。

今の時間帯は、サーニヤさん、エイラさん、宮藤さんが夜間の見張りに出ている。

みんな頑張っている。私も早く仕事を終わらせよう・・・。

私はまだ知らない。

天文学的数字が直ぐ其処まで迫ってきている事に……。

まだ

感じる。エイリアンの気配。

また人間を襲っている。

“人間”

なんで居るの？

みんな死んじやった筈なのに……

人類が滅びた日、私は誓った。

“もう、敵しか居ないんだ”と……

エイリアンの気配を最初に察知したのは数日前。

この日まで私は、人が足を踏み入れる事のない場所で生活していた。
理由といえば、初めて人のいる場所に降り立った時、人は私を恐怖

の目でみていたから。
何故なのかは分からない。

私にしてみれば、人間が何故生きているのか、それを聞きたかった
だけなのに……。

だから、私は人を避けた。

でも、エイリアンが出現した今、そうは言ってられない。

私は守る。

かつての仲間との約束の為に。

人間を、地球を

「……………何か来る。」

唐突に、そう言ったのはサーニャちゃんだった。

「ネウロイカ!?!」

「違う……。」

「……………何……………この音?」

サーニャちゃんは一方の方向をじっと見つめている。

私もそつちに視覚と聴覚を向けると、確かに音が聞こえてきた。

何か・・・機械的な音と、風を切る音。

やがて、その音が段々大きくなってきた。

「凄いスピードで何かが近づいてきてる・・・！」

その内、視界に何やら黒い物体が見えてきた。

その物体は、尋常ならぬスピードで私達のいる場所に突っ込んで来た。

ステラがエイリアンの気配がした場所へ、ブリュンヒルデを飛ばしている、レーダーが複数の熱源反応を捉えた。

前方3 km 辺りだった。その辺りには島などがある様子は無い。

そうになると、反応は海中か空に有るという事になる。

後数十秒後には接触する。敵の可能性も有るので、彼女はその目に炎を宿し、戦闘準備を取る。

この機体の武装は、両側の大型ブレードと、20 mm 口径ガトリング、ミサイルを備えていて、かなり豊富な武装だ。

万ーを考え、ガトリングの起動スイッチに手を掛け、機体の速度を更に上げる。

そして、目標が彼女の視界に写った時、彼女は一瞬啞然とした。

そこにいたのは・・・

足に妙な物を装着した、同じ年代の少女だった。

「ひゃあ!!?」

「おワッ!!?」

「キャア!!」

私を含め、サーニャちゃんとエイラさんは、もの凄いスピードで接近してきた物体の風圧に、吹き飛ばされてしまった。

「サーニャアアー!!」

辛うじて咄嗟にシールドを張ったエイラさんが一早く復帰し、サーニャちゃんに向かって行く。

私も、魔導エンジンを吹かし、何とか体制を立て直す事に成功した
「大丈夫か!ミヤフジ!？」

エイラさんがサーニャちゃんと一緒に向かって来た。

「私は大丈夫です！」

「サーニャちゃんは!？」

「私は・・・大丈夫。」

どうやら無事だったようだった。

「何なんだ！今のハ！？」

「分からない・・・でも、ネウロイじゃなかったわ。」

確かに、ネウロイじゃなかった。
攻撃してくる気配すらなかったし。

「軽く音速を凌駕してたゾ。」

速かったし・・・。

それに・・・

「あ、あの」

見えたんだ・・・

「私、飛ばされる直前に、蒼い炎を見た気がしたんですけど、二人は見なかった？」

「ああ、私にも見えたゾ。
サーニヤはどうだった？」

「私も見た・・・。」

神秘的な炎を。

なんだったのかな・・・今の。

人間に見えたけれど、確かに動物の耳と尻尾が見えた様な・・・。

でも、追って来ないし、敵ではないのかな・・・。
私と同じ位の少女達・・・。

私は今何歳なのかな・・・。

何故か体は全く成長しないし・・・。

そつえば、私の誕生日って何時？

覚醒した時？

生態ポットに入れられた時？

博士が、私にアーマメント技術を施した時？

私は・・・。。。。。

「蒼い炎？」

翌日、夜間の見回りをしたのに、何故か目の覚めた私は、親友リィ

ネちゃんに、昨夜の事を話していた。

「その事、ミーナ中佐には方向したの？」

「うん、帰って来てから直ぐ。」

その話になったら、なんかミーナ中佐の様子がおかしかった感じがしたんだけど・・・。

「

そんな事を話していたとき・・・

突如、基地内に響く警報音。

「何、ネウロイ!？」

「行こう、リーネちゃん。」

ハンガーへと走ってゆく私達に、声がかかる。

「宮藤、リネット!!」

「坂本さん!!」

「ネウロイですか!？」

「まだ分かん。だが、どうやら何者かが基地内に侵入したようだ。」

「此処に!？」

「反応はハンガーと滑走路から来ている。二人とも急げッ!!」

「はい!」「」

フフフ・・・

もうすぐだ・・・

ホワイトと魔女達が出会う・・・

プロローグは終わりだ・・・

さあ。

新たなゲームを、始めようではないか!

S t o r y 推奨1 v 3 『C O M E B R S 』（前書き）

中間試験が終わり、慣れないスマートフォンでの初投稿です。遅く
なって申し訳ありませんでした。

読みにくい箇所、誤植等があるかもしれませんが。
ごめんなさい。

因みに、何時もより、少しだけ長く出来ました。

その分グダグダかもしれませんが

Story 推奨Lv 3 『COME BACKS』

基地内の異変に真つ先に気がついたのは、ハンガーでストライカーの改良に専念するシャーロット・E・イエガーと、同じくハンガーで昼寝中のフランチェスカ・ルッキーニだった。

突如、ハンガー内に何やら金属が軋むような不快な騒音が響き渡る。

「ん？なんの音だよ！？」

「うじゅー……。うるさーい……」

ルッキーニも眠い目を開け、ハンガー内に目を行き渡らせる。

そして音源に気づいた。

ハンガーと滑走路を両断するハッチ。それが、徐々に内側へと凹んで来て要ることに。

恐らく外側から何らかの力で押されているのだろう。

シャーリーがその考えに行き着いた時には、既に次の異変が起き始めていた。

今まで凹みを増し続けていたハッチが、突然爆発したかのような轟音と共に破られた。

舞い上がる木片やら工具やら埃etc……。でハンガー内が滅茶苦茶になる。

「おわアアア！！！？」

余りに突然の事態に、シャーリーも驚愕の悲鳴を挙げる。

しばらくの時を置き、ハンガー内の埃煙が晴れ、滑走路の向こう側が見えてきた。

「なんだろあれっ！？」

ルッキーニがすつとんきような声を挙げる。

そこに存在していたのは、大小様々な生物の形に似た機械のようなもの。それが、数十単位で存在していた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

機械集団とシャーリー & amp・ルッキーニ

双方に沈黙が流れる。

そして・・・

その沈黙は、蜂のような機械から放たれた熱線により破られた。

シャーリーはありつたけの声で叫ぶ。

「敵襲うううううッ！！！！！！！！」

叫ぶとほぼ同時、基地内の警報が唸りをあげる。

「やるぞルツキーニ！！とりあえず、こいつらを基地から誘き出すぞ！！」

「ラジャー！！」

すんでで元に戻したストライカーを装着し、出撃準備に入りつつ、自分達に飛んでくる熱線をシールドで防ぐ。

中佐・・・！

早く来てくれ・・・。そして戦闘の許可を！
そうシャーリーは心の中で願った。

気配を感じるまでもない。

また現れた。それも凄い数・・・。

A級エイリアン一人が引き連れていたアーマメントの数に匹敵する。

急がないと・・・。

そこに人間がいたら・・・。

殺されてしまう！

ハンガーに向かう途中で、シャーリーとルツキーニ以外との隊員と合流した。

恐らく、あの二人は元々からハンガーにいた筈だ。

だとしたら危ないしかし、警報の原因は一体何だ？

ネウロイならば、もっと早くから警戒態勢が敷かれていた筈。そもそも、後2日間、ネウロイの進行はここまで届かない。そう報告を受けていた。

まさか観測ミスだということのか！？

ともかく、一刻も早く、諸悪の根元を叩かなければ。

私はそう思いながら、ハンガーへと辿り着いた。

ひどい有り様だ。ハッチは大破し、様々な物が散乱していた。そんな中、ハッチ付近に、大小様々な大量の機械らしき物があり、ハンガー内に攻撃を加えていた。

そして、その機械集団と向かいあっているシャーリーとルツキーニ。シールドでハンガー奥に被害が出ないよう守っている。お陰で、ストライカーには被害は見受けられない。

「少佐！みんなっ！早くしてくれ！」

シャーリーが叫ぶ。敵の攻撃は大した事はないが、何分数が多い。防戦一方はキツいだろう。

「ミーンナッ！！」

我々のリーダーに指示を仰ぐ。

「分かっているわ！

第一戦闘体制！

全機出撃！」

「了解！！」

皆から声上がり、ストライカーを装着し、出撃していく。

その間にも、機械集団からの攻撃は続くが、照準は我々に向けられ、基地の被害拡大は免れた。

後はコイツらを片付けるだけ。

そう思うと同時、

「攻撃開始ッ！！！！」

我々の反撃が開始された。

各々が、ヤツらに対し攻撃を開始する。

私は上空から、固有魔法の魔眼を使いヤツらを見下ろす。

もし、ヤツらが新型ネウロイならば、コアが有るはず。

しかし、私の眼にはコアらしきものが写らなかった。

その時点で、ヤツらがネウロイではないアンノウンだと確信した。

「ミーナ！

ヤツらからはコアを見つけれない。

恐らくネウロイではない。注意しろ！」

「分かったわ！」

そう答えながらミーナが放った銃弾が、ヤツらに風穴を開け、爆発させる。

「随分と脆いわね。 」

あまりの呆気なさに、ミーナも私もしばし呆然とする。

しかし、ヤツらが脆いのならそれは好都合。

「早急に片付けてしまおう」

「そうね、

各機、過重攻撃で敵を殲滅！」

「了解！！！」

この時私たちにあつた慢心が、後々ピンチを招くとは、この時誰も

思っていなかった。

アーマメントが破壊されていくのを感じる。

誰かが戦っているの？

でも、数は一向に減って居ないように感じる。

まさか アレが！？

早く助けないと！！

私は、リーネちゃんと二人でこの敵を相手にしていた。

ハッキリいうと、始めのうちはとても弱く感じた。

攻撃は単純だし、銃弾を数十発打ち込めば、簡単に壊れた。

でも、時がたつにつれ、

おかしい事に気がついた。

「この機械 ！」

全然減らないよ！」

リーネちゃんが疑問を口にする。

そう、機械達はもの凄い速さで破壊されている筈なのに、一向に減る様子が無い。

まるで、無限に溢れ出てくるようである。

「くツ　このままでは弾のジリ貧だ。

固有魔法でたたかえる奴らはともかく、宮藤、リネット。

お前たちは下がっている！！」

坂本さんから容赦ない言葉が掛かるけど、それは事実だから仕方ないよね。

その言葉に従い、ハンガー戻ろうとして気づいた。

ウサギのような形をした機械が八機、私とリーネちゃんを包囲して、エネルギー砲の銃口をこっちに向けていることに。

「宮藤、リネット！！！」

坂本さんが叫ぶと同時に、収束された熱線が、全方位から私とリーネちゃん目掛けて発射されていた。

私は咄嗟にシールドをはる。

でも、私のシールドが常人より大きくても、全方位は防ぎようがない。

あっという間に、ストライカーに着弾してしまった。

「きゃああああー!!」

「宮藤イイイ!!」

坂本さんが私の名前を呼んでいる。

態勢を立て直そうとするけれど、ストライカーは言うことを聞いてくれない。

数秒の浮遊間の後、背中に体験したことのないような衝撃が走る。

息が詰まり、目の前が歪む。

私が落ちたのは、滑走路の端。そこには、何やら紫色のタワーのようない慣れない物があった。

リーネちゃんはまだ浮いていた。

良かった。

無事だったんだ。

坂本さんが駆け寄って来てくれているけれど、それよりも早く、機械が私に攻撃をしようとエネルギーを収束している。

不気味に光る銃口を見て、私は恐怖よりも、みんなに対する申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

ごめんなさい。

みんな。

まさに攻撃が放たれるその瞬間

機械がいきなり爆発した。

「え？」

思わず間拔けな声が出る。

霞む目が最後にとらえたのは、猛スピードで向かってくる見覚えのある黒い機体だった。

アーマメントの反応地点に到着すると、そこは海岸に面した基地のような所だった。コックピットの窓から外をみると、昨夜見た奇妙なユニットを装着した少女十一人と、大量のアーマメント。そして予想していた物があった。

“ジェネレーター”

無限にアーマメントを生み出す最悪のオブジェ。

再度外を確認すると、ジェネレーターの傍に倒れている少女がいた。

そして、その少女に攻撃しようとしている“ミニラビット”。

「させないッ!!」

その言葉にし、ガトリングガンを連射する。

爆音と共に発射された銃弾は、ミニラビットを意図もたやすく引き裂き、爆発させた。

それでも、少女の周りにはまだ沢山敵がいる。

ブリュンヒルデをオートパイロットで海に着陸させるようにし、コックピットから飛び降りた。

「何なんだあれは!?!」

隣で美緒が疑問の声をあげているけれど、私には心辺りがあった。

昨夜宮藤さんから報告があつた謎の飛行物体。

見た目はプロペラのない戦闘機と言つた所かしら。

そんな事を考えていると、その中から、人影が飛び出してきた。

漆黒の服。左手についた巨大な何か。右手に握られた長剣。左右不釣り合いの長さのツインテール。

そして何より、その瞳に宿る蒼い炎。

嫌というほど見覚えのある少女が私達の前に降り立った。

しかし、それも一瞬だった。

突如、少女の姿が消え、数秒後、機械達が次々と破壊され始めた。

皆が騒然とする中、私は固有魔法を発動し、少女の位置を掴むことに成功した。

常人では有り得ない、運動神経で機械達を破壊してゆく。

私達がストライカーを装着して出すような、持続的な速度ではない。

瞬間的な速度。

それを武器に、少女は機械達を圧倒している。

少女が向かったのは、宮藤さんが墜落した場所。

そこには、機械達と同じようなデザインのタワーが存在していた。

少女はためらいなく、そのタワーに攻撃を仕掛ける。

固有魔法でも追うのがやつのスピードで、少女はタワーを破壊した。

タワーは小さく収納された後、大爆発を起こす。

「宮藤イイイ！！」

「芳佳ちゃんッ！！！」

皆が叫ぶ。しかし、私は何故か宮藤さんが無事だという確信が持てた。

しばらくの後、僅かに残った機械を右手の長剣で切り裂きながら、少女が宮藤さんをおんぶしながら燃え盛る炎の中から姿を表した。

私には、その光景がとても神秘的に見えてならなかった。

S t o r y 推奨I v 3 『C O M E B R S 』(後書き)

また直ぐに期末試験とか

Story 推奨Lv・4 「MOON RESTAUNT」(前書き)

文化祭、新人戦、強行遠足。秋の高校生って忙しい
としみじみ感じながら書いた5話目。

かなりグダグダですが、それでもよい方はどうぞ

Story 推奨Lv.4 「MOON RESTAUNT」

良かった。

助ける事が出来た。

数年のブランクはあるけど、やれる！

もう自分の前で、他人が死ぬのは見たくない。

でも この子も仲間らしい人達も、本当に人間なのかな。

そんな事を数年前からずっと思っている。

私は知っている。

人間は、かつてのエイリアンとの大戦で大敗し、滅亡したことを。

でも、数年前のあの日以来、私は沢山の人間を見た。

最初は信じられなかったけれど、どう見ても彼らは人間だった。

そして、今私の前にいる軍人らしき少女達も、きっと人間。

そう思いたい。思いたいんだけど。

明らかに人間のものではない動物の耳や尻尾が生えてるし、ズボン履いてないし、脚に付けた変なモノで空飛んでたし。

人間かどうか疑うのも仕方ないよね。

そうは言っても、私自身生体アーマメント技術を施された、『シン
グ・ラブ』のクローン体。

やはり人間とは違う存在。

だから私に彼女達を詮索する権利なんてない。

彼女達としっかり接触しよう。

もし彼女達が人間に害を与える存在なら、全力を持って叩こう。

それが私。

人類最終兵器の役目。

そう考え、改めて背中の中の少女に意識を戻した私は、少女の息遣いが
荒くなっている事に気づいた。

先の墜落のせいで身体に異常が出て来ているのかもしれない。

心配に思った私は、少女の額に自分の額を重ねる。

刹那、強い静電気のようなショックと共に何もかもが分からなくな
り、私は気を失った。

あの少女だ。

ひと目で分かった。私の中に眠る、古く、しかし絶対に忘れる事ので
きない記憶。

カールスラントが墮ちたあの日、ネウロイを撃墜し、ネウロイの破片からクリスを守ってくれたあの少女だ。

あの日から、一言礼が言いたくて、探し続けた。

しかし、元々軍の一部に広がっただけの情報、期待虚しく、何一つめぼしい情報はなかった。

だが、少女は再び降臨した。我々のピンチに現れた。

「トウルデー」

ミーナが此方を不安気に見ている。

「ミーナ、お前も覚えているか。」

「ええ

忘れられないわよ。

それよりも今は宮藤さんが心配。

あの子の事はその後よ。」

「ああ。」

そうだ。

今は宮藤の方が心配だ。

仕事に私用を混ぜるべきではない。軍人なら尚更だ。

燃え盛る炎のなかから、宮藤をおんぶしながら此方に向かってくる

少女。

皆も心配そうな顔で二人を見ている。

考える事は宮藤の様子か、正体不明の少女か。

少佐に至っては、自らの刀に手までかけて、相当警戒しているようだ。

ふと、少女が立ち止まり、宮藤の顔に自分の顔を近づけ始めた。

「あいつ！

宮藤に何を」

少佐の声は最後まで続かなかった。

何故と言えば、いきなり少女が倒れたからだ。

「宮藤ッ！」

少佐を始め、皆が宮藤に駆け寄る中、少女を心配している者はいないようだった。

頬に冷たさを感じて、私は目を覚ました。

此処はどこだろう？

坂本さんやリーネちゃん、他のみんなはどこだろう。

私、確か基地を襲って来た機械達に　。

そうだ！

基地は！

みんなは無事なのかな！？

そう思って改めて周りを見回しても、広がるのは見慣れない景色。

暗い星空に瞬く星。

床は一面の市松模様。

ポツリと置かれた純白のサイドテーブルにイス。

あまりに幻想的で私は見とれてしまっていた。

「ん
」

私のすぐ傍で声が聞こえた。

そっちを向くと、私と同年代位の女の子がいた。

「黒」

一言で表すなら当にそんな感じだった。

「大丈夫！？」

「ん？

ああ、目がさめたんだ。

良かった。」

「どういう事？」

「お前、アーマメントに撃墜されたんだよ。覚えてない？」

「あーまめんと？」

よく分からないけど、もしかしてあなたが私を助けてくれたの？」

「一応」

「ありがとう！
私、宮藤芳佳。
あなたは？」

「ステラ。」

「ステラちゃんね。
宜しく。」

「うん」

「ステラちゃん、此処どこ分かる？」

「此処って　　！！」

「知ってるの！？」

「私と、シング・ラブと戦った場所。」

「シング・ラブ？」

それd

「この場所ではホワイトナイトメアと呼んで欲しいがなホワイト。」

それに、歓迎するぞ扶桑の魔女よ。」

私の声は突如聞こえた声にかき消された。

「誰!？」

声がした方を向くと、さっきまで誰も居なかったイスに、女の子が座っていた。

‘白’

ステラちゃんとは相対的な純白。

でも、ステラちゃんと目の前の少女。うり2つだった。

「シング・ラブ!!」

「だからホワイトナイトメアといっておろうが。」

すまんな扶桑の魔女よ。

慌ただしくてな。」

「いえッ!別に!」

いきなり声をかけられたらから、声がうわずっちゃった。

「なんでお前はまだ生きている！

お前は、私が間違いないく倒した筈なのに！」

「そう殺気立つな。

今はお前と剣を交わせる気はない。

この世界には色々と不確定要素が多いからな。

ネウロイに、ウィッチだったかな。

我々がいた世界にはなかったものだ」

「我々の世界？」

「何だ。まだ気づいてないのか？

此処はお前がいた世界ではない。

異世界だよ。

年は1945年。

我々の世界では第二次世界大戦が集結したころだったかな。

しかし、この世界はネウロイという化け物に侵略されつつある、我々の知らぬ世界だ。」

二人がとんでもない事を言い合っている。

ステラちゃんと少女は、異世界、それも未来からやってきたということになる。

「ならこの世界でまたお前は侵略活動しようとしているのか……！」

「いずれはな。」

だが、ネウロイは興味深いと同時に厄介な存在だ。
ネウロイとの決着がつくまでは、大人しくしていてやろう。」

「ふざけるな」

「熱くなるな、何度もいうがこれはゲームだ。

ネウロイと戦い、また一段と強くなったお前を私に見せてくれ。」

ステラちゃんと少女の会話に混ざる暇もなく、少女はさっで行こうとする。

不意に視界がぼやけ、あっという間に何も分からなくなった。

最後に聞こえたのは、少女の妖しげな笑い声だった。

S t o r y 推奨I・V・4 「MOON RESTAUNT」(後書き)

更新スピード早くしたいなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2221w/>

BLACK ROCK SHOOTER the game 【again game full scor】

2011年11月17日19時57分発行